

# 人口構造や疾病構造の変化で 病院経営はどう変わるのか？

病院の経営を考える会は、医療材料・医薬品のSPD業務等を行うエム・シー・ヘルスケア株式会社、顧客病院の経営者向けに毎年開催しているイベント。20回目の節目となる今回は11月29日、「医療と社会の大転換」をテーマに開催された。

## 医療需要の変化に即した 持続可能なシステム構築が急務

講演①では「医療と社会の大転換」をテーマに、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター名誉総長の大島伸一氏と、東京大学高齢社会総合研究機構特任教授の辻哲夫氏が登壇した。

大島氏は冒頭で「高齢化・人口減少が進むことによる人口構造や疾病構造の変化を受け、医療需要が大きく変化しており、医療理念も変わらざるを得ない」と指摘。続いて辻氏は、2040年に向けて85歳以上の死亡者が急増するデータを示し、「医療供給サイドとして、どんな仕組みをつくるのが最大の課題。今から正しい仕組みに変え、40年までに完成させなければなら

ない。まさに正念場」と語った。

これを受けて大島氏は「地域が中心となり、それぞれの地域に合ったケアのあり方をシステムとしてつくり上げていくしかない。私は、地域包括ケアシステムの基本的な



東京大学高齢社会総合研究機構特任教授・辻哲夫氏



国立長寿医療研究センター名誉総長・大島伸一氏

目的は健康支援、生活支援であり、その拠点を地域ごとにつくることだと考えている」と述べた。

辻氏は「地域包括ケアと併せて地域が持続しなければならない。経済なくして持続可能性なし。生活支援産業などと地域包括ケアの両立を実現したい」との考えを示した。

## 人生100年時代を楽しむ 生涯現役社会の実現

講演②「『人生100年時代』の医療・介護」に登壇したのは、経済



経済産業省商務・サービスグループ政策統括調整官・江崎禎英氏

産業省商務・サービスグループ政策統括調整官で、厚生労働省医政局統括調整官、内閣官房健康・医療戦略室次長も務める江崎禎英氏。最初に「イノベーションの本質は常識を変えること。最近『人生100年』と言われるが、固定観念にとられていない限り、新時代を迎えることはできない」と主張。続いて、せつかく人生100年時代が始まっているのに、どう生きたらよいかわからない高齢者が大多数であることこそ最大の課題であると指摘。60歳以降を「2周目の人生」とするならば、この2周目の人生における幸せの形を見つけていることが健康長寿社会につながる。さらに、「人生100年時代を迎え、医療・介護のあり方が問われている」とし、「病気になるしない」重



「医療と社会をデザインする」をテーマにした鼎談では、街づくり・人づくりを含めた地域における病院の役割が議論された

## 患者の人生を支えるために 必要な病院イノベーション

症化させない「切り離さない」というポイントを押さえた医療・介護を行うことで、これまでとは違った時代が始まるとの期待を語った。「人生にピークをつくってはいけません。80歳になっても100歳になっても、今がいちばん楽しいと言え、社会を実現したい。生涯現役なんて当たり前。最期まで誰かに『ありがとう』と言われる社会にするために、今やるべきことを考えていこう」と呼びかけた。

第3部の鼎談テーマは「医療と社会をデザインする」。社会医療法人



社会医療法人財団董仙会理事長・神野正博氏

財団董仙会理事長の神野正博氏、社会医療法人祐愛会理事長の織田正道氏、国民健康保険志摩市民病院院長の江角悠太氏が参加し、各法人・病院の事例を紹介した後、地域社会における医療のかかわりについてディスカッションを行った。

最初に神野氏が、「病院はライフ産業。命を助けるだけではなく、生活や人生を支えていくのが病院の役割だと意識を変えていく必要がある」と述べた。医療の守備範囲の再構築はもちろん、患者が自主的に自身の病気にかかわることや、ヘルスケア産業と連携し最新技術の導入を進めることで、病院のイノベーションがスピーディーに進むとの考えを示した。

織田氏は、ICTを活用し「治し、支える医療」への本格的な転換を図った事例を紹介。85歳以上人口の急増により地域医療が大きく変



社会医療法人祐愛会理事長・織田正道氏

わっていることを受け、在宅医療を支えるための具体的な方法として、退院直後のケアの継続と在宅患者を支えるための仕組みづくりに着手。多職種協働のMBC(Medical Base Camp)を組織し、クラウド化による電子カルテの共有によって、退院後2週間のフォロー体制を強化。医療・在宅・介護をスムーズにつなげた成果を報告した。また、自宅の液晶テレビを活用した遠隔診療や見守りシステムも紹介。「人材不足の今、ICTをいかに使うかが大きなテーマになる」と展望を語った。

30代の若手医師である江角氏は、急激に進む高齢社会における医療のあり方について、「われわれ若い世代が当事者意識をもって20年後30年後、日本の医療がどうなっていくかを知り、そのなかで自分たちがどう動いていくべきかを模索する必要がある」と述べた。また、



国民健康保険志摩市民病院院長・江角悠太氏

地域医療においては、家族の存在が重要であると指摘。同じ地域内に家族が住めるようなまちづくりが、高齢社会を支える大きな要素になると語った。

その後のディスカッションで神野氏が「何をもちて地域包括ケアシステムか」と疑問を投げかけると、江角氏は「目の前の患者さん一人ひとりが幸せになるように医療・介護に限らず、すべての業種の人と協力しながら行うもの」、織田氏は「ポイントは地域の絆。地方では絆が意外と残っているのです。そこにわれわれ医療者も入っていくことが重要」と応じ、地域医療の原点を示した。最後に神野氏が「医療と社会をデザインする」というテーマで議論してきたが、デザインするのはあくまで「私」たちが主体である」と強調し、5時間にわたった本会を締めくくった。